

2024/8/4

ルカの福音書 講解メッセージ⑰

『ルカの福音書 7章 1-28節 百人隊長の信仰』

■神のことばこそ奇跡

「イエスは、耳を傾けている民衆にこれらのことばをみな話し終えられると、カペナウムに入られた。ところが、ある百人隊長に重んじられているひとりのしもべが、病気で死にかけていた。百人隊長は、イエスのことを聞き、みもとにユダヤ人の長老たちを送って、しもべを助けに来てくださるようお願いした。」(ルカ 7:1-3)

百人隊長とは、100人の部下を持つローマの兵士です。イスラエルを統治していたローマの百人隊長はイエス様のことを聞き、ユダヤの長老たちに頼んで、自分の部下をイエス様にいやしてもらえるように、願い出てもらったのです。

ここから、神と私たちの出会う場所は苦しみだということがわかります。百人隊長が苦しみに出会ってイエス様にいやしを求めたように、私たちも苦しみに出会ったならば、その重荷をイエス様のところに持っていけばよいのです。

「イエスのもとに来たその人たちは、熱心をお願いして言った。「この人は、あなたにそうしていただく資格のある人です。この人は、私たちの国民を愛し、私たちのために会堂を建ててくれた人です。」イエスは、彼らと一緒に行かれた。そして、百人隊長の家からあまり遠くない所に来られたとき、百人隊長は友人たちを使いに出して、イエスに伝えた。「主よ。わざわざおいでくださいませのように。あなたを私の屋根の下にお入れする資格は、私にはありません。ですから、私のほうから伺うことさえ失礼と存じました。ただ、おことばをいただかせてください。そうすれば、私のしもべは必ずいやされます。と申しますのは、私も権威の下にある者ですが、私の下にも兵士たちがいまして、そのひとりに『行け』と言えば行きますし、別の者に『来い』と言えば来ます。また、しもべに『これをせよ』と言えば、そのとおりにいたします。」(ルカ 7:4-8)

この百人隊長は、ローマ人でありながら、キリスト教に対して心を開き、会堂まで建ててくれた人でした。長老たちから話を聞いたイエス様は、彼らと一緒に百人隊長

の家に向かいましたが、それを知った百人隊長は、「自分はイエス様を家にお入れする資格がない。ただ、部下をいやすというおことばをください。」と願い出たのです。このようなことが言えるのは、百人隊長はイエス様のことばに神の権威があることを信じていたからです。

権威とは、力をコントロールするものです。たとえば、車と人間では、車のほうに力がありますが、警察が手を挙げて止まるように指示をすれば、車は止まります。それは、警察に権威があるからです。この百人隊長は、権威は力に勝ることを知っており、権威は言葉によって発せられることを知っていたので、神のことばを求めたのです。

人は、見えるところで何か起きることが神の奇跡だと思いがちです。しかし、百人隊長は、神のことばを信じる場所に神のわざがあると信じたのです。その通り、神のことばを信じるこそが、神のわざであり、奇跡なのです。

この地上で最も驚く奇跡は、死人が生き返ることです。そして、私たちは生まれながらに死人だと聖書は教えています。それは、私たちの体は朽ちる体であり、この体で神の国に入ることはできないからです。それが生まれながらに死人であるということです。イエス・キリストは、この死人を生き返らせるために来られました。神は、死人である私たちに呼びかけ、その呼びかけに応答した者、すなわち、神のことばを信じた者は救われ、死からいのちに移されます。ですから、私たちはすでに死からいのちに移され、生きる者となっているのです。つまり、私たちは皆死人が生き返るといふ奇跡を体験しているのです。

「まことに、まことに、あなたがたに告げます。死人が神の子の声を聞く時が来ます。今がその時です。そして、聞く者は生きるのです。」(ヨハネ 5:25)

神の呼びかけに応答した時、人はよみがえります。つまり、イエス・キリストを信じる者は、死人の状態からよみがえったのです。ですから、神のことばを信じるのが神のわざなのです。誰もが、その奇跡を体験しているのですが、果たして苦しみに出会ったとき、あなたは神のことばを求めているでしょうか。見える奇跡だけを求めているでしょうか。

「すると彼らはイエスに言った。「私たちは、神のわざを行うために、何をすべきでしょうか。」イエスは答えて言われた。「あなたがたが、神が遣わした者を信じること、それが神のわざです。」(ヨハネ 6:28-29)

神のことばに力があるのです。見えるものは、それに付随するものです。まず神のことばを求めましょう。神のわざとは、神のことばです。神のことばが奇跡であり、それが私たちを生き返らせるのです。百人隊長はそのことをわきまえていたので、本心から「ただおことばをください」と願うことができました。そして、イエス・キリストは、この言葉を聞いて、感動を覚えました。

「これを聞いて、イエスは驚かれ、ついて来ていた群衆のほうに向けて言われた。「あなたがたに言いますが、このようなりっぱな信仰は、イスラエルの中にも見たことがありません。」使いに来た人たちが家に帰ってみると、しもべはよくなっていた。」(ルカ 7:9-10)

誰もが見える奇跡を求める中、この百人隊長だけが神のことばを求めました。イエス様がこのことに感動なさったということは、神が私たちに求めていることは、見えるものではなく、神のことばを信じることだということです。

あなたは、神のことばを信じているでしょうか。そうではなく、見える出来事を通して、神は私を愛してくれていないとつぶやいてはいないでしょうか。

この百人隊長の信仰の結果、しもべはいやされました。マタイの福音書では、この時イエス様は「さあ行きなさい。あなたの信じたとおりになるように。」と語られたとあります。神のことばを信じたなら、そのとおりになります。

「それから間もなく、イエスはナインという町に行かれた。弟子たちと大ぜいの人々の群れがいっしょに行った。イエスが町の門に近づかれると、やもめとなった母親のひとり息子が、死んでかつぎ出されたところであった。町の人たちが大ぜいその母親につき添っていた。主はその母親を見てかわいそうに思い、「泣かなくてもよい」と言われた。そして近寄って棺に手をかけられると、かついでいた人たちが立ち止まったので、「青年よ。あなたに言う、起きなさい」と言われた。すると、その死人が起き上がって、ものを言い始めたので、イエスは彼を母親に返された。人々は恐れを抱き、「大預言者が私たちのうちに現れた」とか、「神がその民を顧みてくださった」などと言って、神をあがめた。イエスについてこの話がユダヤ全土と回りの地方一帯に広まった。」(ルカ 7:11-17)

イエス様は、神のことばを通して、青年を生き返らされました。神のことばが奇跡であり、神のことばを信じるのが神のわざなのです。神のことばを信じれば、死んでいた私たちは生きるものとなります。

神のことばを信じるのが、人生における奇跡です。神のことばを求め、信じるのが、私たちの心に平安をもたらします。その平安こそが神の答えであり、いつまでも残る宝です。見える奇跡は一時的です。しかし、神のことばを信じる信仰は、いつまでも残ります。それが希望となり、愛となるのです。

■バプテスマのヨハネ

「さて、ヨハネの弟子たちは、これらのことをすべてヨハネに報告した。すると、ヨハネは、弟子の中からふたりを呼び寄せて、主のもとに送り、「おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、私たちはほかの方を待つべきでしょうか」と言わせた。ふたりはみもとに来て言った。「バプテスマのヨハネから遣わされてまいりました。『おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも私たちはなおほかの方を待つべきでしょうか』とヨハネが申しております。」（ルカ 7:18-20）

バプテスマのヨハネには、救い主の道を整える務めがありましたから、キリストがどのような方かという預言をよく知っていました。その中に、キリストは私たちの病を背負い、私たちの病を癒されるという預言があります。ですから、彼は、人々の病がいやされている様子を聞いたとき、この方が待ち望んでいたキリストなのだろうか、と弟子に尋ねさせたのです。

「私たちの聞いたことを、だれが信じたか。主の御腕は、だれに現れたのか。彼は主の前に若枝のように芽ばえ、砂漠の地から出る根のように育った。彼には、私たちが見とれるような姿もなく、輝きもなく、私たちが慕うような見ばえもない。彼はさげすまれ、人々からのけ者にされ、悲しみの人で病を知っていた。人が顔をそむけるほどさげすまれ、私たちも彼を尊ばなかった。まことに、彼は私たちの病を負い、私たちの痛みをになった。だが、私たちは思った。彼は罰せられ、神に打たれ、苦しめられたのだと。しかし、彼は、私たちのそむきの罪のために刺し通され、私たちの咎のために砕かれた。彼への懲らしめが私たちに平安をもたらし、彼の打ち傷によって、私たちはいやされた。」（イザヤ 53:1-5）

イエス・キリストの生涯は、まさにこのとおりであり、キリストの十字架は、私たちの病を背負ったものでした。その病は、5節では「そむきの罪」と言い換えられています。罪も病も、原因は死です。キリストはその両方をいやされたのです。バプテスマのヨハネは、このように病をいやす方はキリストであるということをよく知っていたので、弟子を通して、あなたこそがキリストでしょうかと尋ねたのです。

「ちょうどそのころ、イエスは、多くの人々を病気と苦しみと悪霊からいやし、また多くの盲人を見えるようにされた。そして、答えてこう言われた。「あなたがたは行って、自分たちの見たり聞いたりしたことをヨハネに報告しなさい。目の見えない者が見、足のなえた者が歩き、ツアラアトに冒された者がきよめられ、耳の聞こえない者が聞き、死人が生き返り、貧しい者たちに福音が宣べ伝えられている。だれでもわたしにつまずかない者は幸いです。」(ルカ 7:21-23)

イエス様は、ヨハネの弟子たちに対して、イエスカノーで答えるのではなく、あなたがたが見聞きしたことをそのまま伝えるように言われました。それは、ヨハネにはキリストとわかるメッセージです。

「ヨハネの使いが帰ってから、イエスは群衆に、ヨハネについて話された。「あなたがたは、何を見に荒野に出て行ったのですか。風に揺れる葦ですか。でなかったら、何を見に行ったのですか。柔らかい着物を着た人ですか。きらびやかな着物を着て、ぜいたくに暮らしている人たちなら宮殿にいます。でなかったら、何を見に行ったのですか。預言者ですか。そのとおり。だが、わたしが言いましょう。預言者よりもすぐれた者をです。その人こそ、『見よ、わたしは使いをあなたの前に遣わし、あなたの道を、あなたの前に備えさせよう。』と書かれているその人です。」(ルカ 7:24-27)

これは、マラキ書の預言です。ヨハネこそ、キリストの前に来て道を整えると預言されている人物だと、イエス様は言われたのです。預言は成就し、神は約束を守る方であることが教えられています。

「あなたがたに言いますが、女から生まれた者の中で、ヨハネよりもすぐれた人は、ひとりもいません。しかし、神の国で一番小さい者でも、彼よりすぐれています。」(ルカ 7:28)

この地上では、人と人を比較し、その能力に順位をつけることができます。その見方では、確かにヨハネほど立派な働きをした人はいません。しかし、私たちは、自分が生きてきた人生を分母として、比較をします。もし、その分母が無限であったなら、どんなものを分子に持ってきても、それは限りなく0に近く、大した違いはなくなってしまう。

私たちは死からいのちに移されて、永遠のいのちを持っています。つまり、分母は無限になったのです。ですから、神の国では、この地上で一番小さい者であっても彼と同じ、いや彼よりも優れていると強調しているのです。

つまり、私たちをこの地上で苦しめているのは分母です。人生の患難や苦しみは、あなたの分母がそれを数えさせています。しかし、分母が無限になったなら、それは一瞬の出来事です。人生が長くなればなるほど、過去の出来事は思い出となって一瞬になります。重い神の栄光という分母をもらったので、患難は軽くなるわけです。だから私たちは、希望を失うことがないのです。

神の国で人と人との差はなく、この地上で差があるように見えるのは、ただの惑わしです。この日本で最も高い山は富士山です。しかし、月から富士山を見てもその高低差はわかりません。金星から見たら、地球そのものが点です。近くで見れば一喜一憂することも、遠く見るとまったく気にならなくなります。神は永遠であり無限です。ですから、神の目には誰が上で誰が下かという概念はありません。自分を低くする者は高くされ、自分を高くする者は低くされます。神の目にはすべて同じだからです。誰もが神にとって必要であり、大切な存在なのです。